

重度神経症群鑑別のための精神物理学の数式化

——自己愛空想による鑑別査定仮説 2——

大 橋 良 枝

抄 録

本論では前項（川村，2013）において示された重度神経症群鑑別のための発達の人格構造鑑別診断仮説の物理学の数式化を試みた。これは、当該仮説の力動表現の妥当性精練を狙ったものであった。その結果、改めて高次神経症性人格構造群の力動仮説が構成され、重度神経症群の仮説も修正に至り、前稿で課題に挙げられた仮説の精緻化を進めることができた。今後は事例検討などの手続きによって仮説のさらなる精緻化、傍証・検証が進むことを望む。

キーワード：重度神経症，鑑別診断，精神物理学の数式化，心理力動

1. はじめに

筆者は前稿（川村，2013）において、現行の診断基準では重篤な診断を受けてしまうものの、心理療法による治療可能性の高い神経症性人格構造群を重度神経症群と定位し、彼らを鑑別する精神分析的理解を理論的にまとめ、診断・査定基準仮説を自己愛空想という視点から示した。これは、力動的診断の重要性を主張したものであった。

この研究の理論背景は、カーンバーグ（Kernberg, 1984）の研究によるところが大きかった。境界例診断の問題が議論的となった1970年代後半から1980年代に、自身の臨床研究をまとめたカーンバーグが「心理力動的」に境界性人格構造群を識別しようとした鑑別診断法（Kernberg, 1984）は非常に注目を集めたが、ウォーラスタイン（Wallerstein, 1986）も述べたように、それも結局のところ、様態の「記述」の枠を越えることはできなかった。表現方法がやはりカテゴリー的になってしまったことが一因だろう。

この診断や査定において心理力動を反映できない現状は、川村（2013）がまとめているように、PTSDや青年期退行群などの他の力動によって境界反応を示す群を神経症性人格構造群として同定できずに、境界性人格構造群と識別してしまう結果を生んでいる。診断のゴミ箱化（Gunderson,

2001) と呼ばれる、より高次の患者 / クライアントを境界例などの重い病態とみなす現象が広がっているが、そこにひとつは診断 / 査定基準表現の表現における妥当性の問題があると言えよう。

この問題に応えるものとして、本論では、武山ら (2009) による物理学理論を通しての精神分析学、力動論、および精神分析的システムズ理論 (小谷, 2008a, b) の公式化に着目した。等式は、変数間の力動的均衡関係を表現する言語であり、力動の表現媒体としての機能を有する。心理学の方法論が現状に応えるのに限界があるならば、旧来の方法論に固執せず、他分野の方法論を援用してみてもどうか。

そこで, Bach (1977) の自己愛空想 (narcissistic fantasy) という現象に焦点化した川村 (2013) の自己愛空想浮上時における発達論的人格構造鑑別診断仮説 (表1) に基づき、本論では心理療法適用性の高い重度神経症群の鑑別診断理論の物理学的数式化を試みる。また、川村 (2013) は、表1の仮説の洗練を今後の課題としたが、数式化によって力動表現の妥当性を吟味することも狙う。

表1：自己愛空想浮上時における発達論的鑑別診断基準理論仮説 (川村, 2013 に基づく)

精神病人格構造群	共生期までの固着、つまり愛着の内在化の失敗のため、常に一者期的な幻想状態に耽溺しており、外的現実そのものが脅威である。したがって、外的現実が意識されると自己愛の危機に瀕することとなる。そのために、リビドー枯渇あるいは枯渇の危機は常に存在し、自己愛空想は常態化する。
境界性人格構造群	分離個体化期固着、つまり対象恒常性の内在化の失敗のため、自己愛の供給源そのものが内在化されていない。そのために、自己愛の維持が常に二者期的な幻想状態に依存することになり、外的現実が幻想とずれると自己愛の枯渇あるいは枯渇の危機が起き、自己愛空想も常態化する。
重度神経症群	潜伏期前期固着を有する。つまり、対象恒常性は確立しており、基本的な自己愛保持能力と、人格構造要素の基本的素因を獲得している。それにも関わらず、自己愛空想の慢性化を示すのは、心的安全空間の形成途上の過程にあるかあるいは未発達であり、また、厳格な原始的超自我が残存するために、内的に欲動エネルギーの浮上が起きると自我が起動するための心的空間の脆弱な境界が揺らがされる。そのため、自我が起動するための心的空間が維持されず、対象関係機能が退行し、自己愛空想が浮上する特徴を持つ。

2. 原理

物理学の原理に基づき、現象の数式的記述を試みる。その手法は、武山ら (2009) による心理物理学的な検討に依拠したものである。

武山ら (2009) は、顕現様態として示される主体の反応の変分 ΔF が、人格構造 A によって欲

動の変分 ΔX を変換した結果として表出するものであると説明している⁽¹⁾。式1に示したその表現は、形式的にはベクトル演算形あるいは行列演算形をとっており、ニューラルネットワークのもっとも基本的な表現とも整合している。

$$\Delta F = A \cdot \Delta X \quad \cdots \cdots \text{式 1}$$

そこで、仮説において条件設定されている、自己愛空想浮上時の人格構造 A と欲動 ΔX を表現するため、式1に示した反応 ΔF を自己愛空想に対応付けることにする。

同様に本論では、人格構造 A が3種類の部分行列、すなわち生得的でありもっとも基底的なニューラルネットワーク(A_a)と愛着(A_b)および対象恒常性(A_c)によって構成されているものと考え、これらからなる構造が確立した人格構造 A_3 を、式2-1のように構成する。この人格構造 A は、川村(2013)に示された通り、健康な自己愛の発達の要素であり、人格構造発達段階に対応する要素によって構成されている。

$$A_3 = \begin{bmatrix} A_c \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 2-1}$$

このような人格構造 A_3 であれば、どのような欲動の浮上 ΔX についてもそれを反映した反応 ΔF_3 への変換が成立する。

$$\Delta F_3 = \begin{bmatrix} \Delta F_c \\ \Delta F_b \\ \Delta F_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A_c \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \cdot \Delta X \quad \cdots \cdots \text{式 2-2}$$

一方、境界性人格構造 A_{bor} については対象恒常性(A_c)の内在化に失敗していると仮説に示されたので、この部分に相当する部分行列が0として構成されることになり、

$$A_{bor} = \begin{bmatrix} 0 \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 2-3}$$

と記述される。この場合には(式2-4)に示す通り、いかに多様な欲動が ΔX として浮上しようとも対象恒常性 A_c によって重み付けられることのない反応 ΔF_{bor} 、すなわち三者期的対象関係パターンを持たない二者期の反応に常態的に縮退⁽²⁾することになる。

$$\Delta F_{bor} = \begin{bmatrix} 0 \\ \Delta F_b \\ \Delta F_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \cdot \Delta X \quad \cdots \cdots \text{式 2-4}$$

さらに精神病性人格構造 A_{psy} の場合は、愛着(A_b)の内在化にも失敗していることを反映し、

$$\mathbf{A}_{\text{psy}} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \mathbf{A}_a \end{bmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 2-5}$$

と記述できる。この場合には、 $\Delta \mathbf{X}$ から $\Delta \mathbf{F}$ への変換は、境界性人格による次元の縮退と比較しても、より顕著に生じることになる。すなわち；

$$\Delta \mathbf{F}_{\text{psy}} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \Delta \mathbf{F}_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \mathbf{A}_a \end{bmatrix} \cdot \Delta \mathbf{X} \quad \cdots \cdots \text{式 2-6}$$

となる。ここでは、欲動 $\Delta \mathbf{X}$ は愛着要素 \mathbf{A}_b や対象恒常性要素 \mathbf{A}_c によって重み付けられることのない反応 $\Delta \mathbf{F}_{\text{psy}}$ を常態的に示すことが示されており、その反応は愛着によって獲得される二者期、対象恒常性に基づいて獲得される三者期的対象関係パターンを持たなくなるものである。

以上の通り、人格構造に次元の縮退が発生すると、それに対応して、多様なエネルギーの浮上 $\Delta \mathbf{X}$ があってもバラエティの少ない常態化した $\Delta \mathbf{F}$ でしか反応しなくなる。境界性人格構造であれば、対象恒常性要素を持たない二者期的縮退反応、精神病性人格構造であれば、対象恒常性要素と愛着要素を持たない一者期的縮退反応が常態的に示されるということである。

では、本論で焦点化している重度神経症群を含む神経症性人格構造群についてはどうか。Kernberg (1984) によれば、重度神経症群であっても、対象恒常性は確立しており、基本的な心的構造体は確立されているものとされるので、その人格構造 \mathbf{A}_{neu} は、

$$\text{神経症性人格構造：} \mathbf{A}_{\text{neu}} = \begin{bmatrix} \mathbf{A}_c \\ \mathbf{A}_b \\ \mathbf{A}_a \end{bmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 2-7}$$

と表現されるべきである。この構造では、欲動 $\Delta \mathbf{X}$ が浮上すると、人格 \mathbf{A}_{neu} のパターン（健康な人格に支えられた個性）にしたがって、縮退が起こることなく何らかのアウトプットがなされることになる。つまり、この表現のままでは重度神経症群が自己愛空想への退行を慢性化させることについては議論できない。そこで、彼らの自己愛空想に関する力動の詳細を解明するために、 \mathbf{A} の内部構造と力動を微視的に検討することにする。

武山ら (2009) によれば、 \mathbf{A} の内部構造は (式 3) のように描かれる。

$$\begin{pmatrix} \Delta F_1 \\ \cdot \\ \Delta F_i \\ \cdot \\ \Delta F_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\partial F_1}{\partial x_1} & \frac{\partial F_1}{\partial x_2} & \frac{\partial F_1}{\partial x_3} & \cdot & \cdot & \cdot \\ \frac{\partial F_2}{\partial x_1} & \frac{\partial F_2}{\partial x_2} & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \frac{\partial F_3}{\partial x_1} & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \frac{\partial F_i}{\partial x_j} & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \frac{\partial F_n}{\partial x_m} \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} \Delta X_1(id) \\ \cdot \\ \Delta X_j(id) \\ \cdot \\ \Delta X_m(id) \end{pmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 3}$$

ここで、 $\partial F_i / \partial X_j$ と偏微分形で定義される **A** の要素は、内面から外界に示される行動パターン F_i の、欲動 ΔX_j に対する反応性（鋭敏度）である。あるいはエネルギーの流れを逆に読んで、外界の変化 ΔF_i に対する認知の変化 ΔX_j に対する感度と見てもよい。

本論では、武山ら（2009）に則り、ここに現れる F_i のそれぞれが、共通の心的要素 $g_k(X)$ によって構成されたと考え、（式 4）のように表記する。

$$F_i = \sum \sigma_k [\text{超自我} \cdot \text{自我}] g_k(x) \quad \cdots \cdots \text{式 4-1}$$

または

$$F_i = (\sigma_1 \sigma_2 \cdot \sigma_k \cdot \sigma_6) \cdot \begin{pmatrix} g_1(X) \\ g_2(X) \\ \cdot \\ g_k(X) \\ \cdot \\ g_n(X) \end{pmatrix} \quad \cdots \cdots \text{式 4-2}$$

ここで σ_k は、**F** の各要素を構成する基質 $g_k(X)$ の構成比を決定する重みである。 σ_k が大きな値をとるほど g_k と自我・超自我の相互作用の結果としての「性質」がより強調されて F_i に出力される。 $\sigma_k = 0$ のときには g_k は F_i に全く反映されず、あたかも g_k が内在化されていないのと同様の出力が起こる。あるいは、超自我によって自我の機能が無効とされれば、同様に、 g_k は F_i に全く反映されず、あたかも g_k が内在化されていないのと同様の出力が起こることを示している。これは、境界性人格構造以下の群が示すのと同じものとして観察される F_i であると考えてよい。

行列を使って（式 4-1）を表記しなおすと（式 4-2）のように書ける。ここでは σ は 1 行多列からなるベクトルとして、 g もまた 1 列多行からなるベクトルとまとめられている。

この形は、 σ と g がそれぞれ場を構成していることを反映している。

σ はまた、主体の自己を定義するバウンダリーの部分的な開閉や透過性に関わっている。つまり、 $\sigma_k = 0$ で遮断、 σ が大きいほどバウンダリーの透過性は高くなる。**A** を構成する σ のパターンは、

心のメカニズム，すなわち心的機制の各機能を制御するソフトウェアとして働く防衛機制として分類できる。 σ パターンには外界から内面に向かう場合の σ in パターンと内面から外面に向かう σ out パターンとがある。両者のバランスは，フィードバック系としての主体の力動に深く関わっている。

さて，主体が外界 F を観察するとき，同時にその主体にとってより好ましい心的な表象 F' が知覚される。それらの間の心的な距離 ϕ は，(式5)のとおり表される。

$$\phi^2 = \sum_i (F_i - F'_i)^2 \quad \cdots \cdots \text{式 5-1}$$

(式4-1)を g を使って記述しなおせば

$$\phi^2 = \sum_i \{ (\sum_k \sigma_{ik} \times (g_k - g'_k))_i \}^2 \quad \cdots \cdots \text{式 5-1}$$

と記述できる。

ここで σ_{ik} は場（あるいは場を構成する各心的要素）に対する主体の関心の強さを相対的に表す重みであり，各心的な特性が主体の自我あるいは自己に与える相対的な影響の強さを表す重みである。

主体の行動原理は，満足度を高める，つまり ϕ を最小化しようとするフィードバック過程（図4の④のプロセス）によって理解される。いわゆる動機と行動による心的平衡のプロセスである。このプロセス力動は，図1のプロセスによって示される。

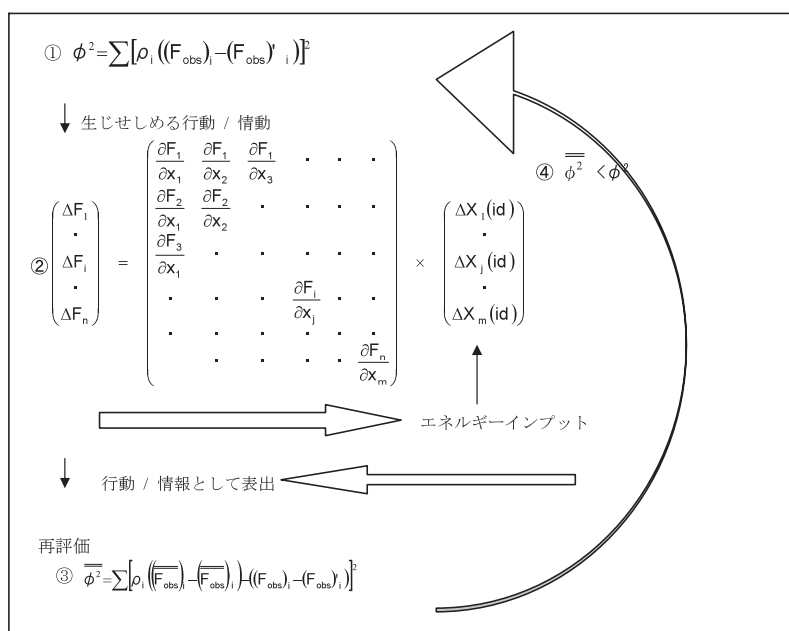


図1：神経症性人格構造のフィードバック力動

3. 考察

式3から5, そして, 図1を用いて, 神経症性人格構造における自己愛空想浮上の力動仮説を再構成する。

重度神経症群の固着は, 理論構成で潜伏期前期にあるものと仮定された。また, その固着は, 新しい外的現実世界における壁を越える体験の積み重ねによって生じる心的安全空間の内在化の失敗であると仮定された。

潜伏期前期における, 新しい外的現実世界での壁を超える体験の積み重ねという現象は, 式2-1における A_a , A_b , A_c , や式3の g_k に対するバウンダリーの書き換えと対応する。つまり, 外的現実による内部構造, 心的表象の修正プロセスの結果である, **A** 自体 (あるいは **A** 全体) のバウンダリー強化, すなわち自我境界が明確となることを示している。図2を見ると視覚的に理解できるかと思うが, それぞれの g_k のバウンダリーが明確になると, **A** 自体 (あるいは **A** 全体) のバウンダリーが明瞭になる。 g_k は自我機能との相互作用によってそのバウンダリーを明瞭にしていくのだから, アイソモルフィの原理 (小谷, 1993) によれば, その自我が動く範囲である自我境界のバウンダリーも明瞭になっていくはずである。それにしたがって, Grotstein (1978) が述べたように, 自我が動く自己の範囲を示す自我境界が明瞭になると内部に自我の動く空間が維持される。これをもって, 潜伏期の安全空間の内在化と呼ぶ。

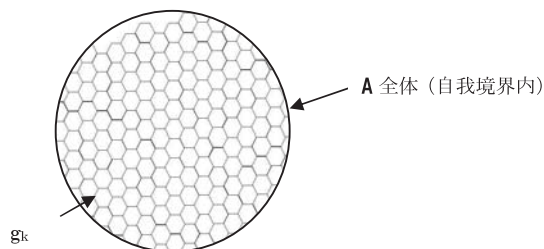


図2: g_k のバウンダリーが明瞭化することで強化される **A** 全体の境界

さらに, 前潜伏期から潜伏期前期の超自我は, 十分に構造化されていない表象としての質を未だ有したものである (Tyson, & Tyson, 1984)。したがって, この書き換えのプロセスを経て超自我は構造体としての独立性を高めていくことになる。

また, 対象恒常性に対応した心的基質 g_k のそれぞれが内在化されるときに, それに伴伴する行動 (あるいは情動) および認知に関する σ_k (それぞれ $\sigma_{k,out}$ および $\sigma_{k,in}$) も同時に取り込まれるが, その時点ではそれらは互いに未分化であって独立制御性にあずからない。物理学的には, それらは in-out が繰り返されることによって互いのバウンダリーを明瞭化させ, 独立制御性を獲得するもの

とされている。つまり、心的基質間のバウンダリーが、潜伏期前期の発達固着によって明瞭化されなかった群は、 σ のそれぞれの分化が十分でなく、むしろ互いに従属性を有するということである。

したがって、 σ によって重み付けられる g_i の結果である A の内部構造それぞれの鋭敏度 $\partial F_i / \partial X_j$ を支配する $\sigma_{k,out}$ と、 $\sigma_{k,in}$ によって重み付けられ認知される場 F が独立性を持たないという構造が固定化する。以下、その結果生じる力動を、図1を用いて物理学的に説明する。

未発達なままの $\sigma_{k,in}$ を通して主体の存在する場を認知した結果、それが主体にとってより望ましい場となるために快感原則にしたがって心的な満足度 ϕ が“ $\phi \rightarrow$ 最小化”となるように主体が生じせしめるべき行動あるいは情動 $\Delta F = F - F'$ が特定されると、それに見合った心的なエネルギー ΔX が主体の内面に引き起こされる。その結果 ΔX に由来する実際の行動（情動）が $\sigma_{k,out}$ によって制御されながら表出する。このようにして変化した新たな場の状態を、新たな満足度 $\overline{\phi^2}$ として主体が評価するとき、主体の期待に反して $\overline{\phi^2} < \phi^2$ が達成されず、 $\overline{\phi^2} > \phi^2$ が著しくなるような状況を想定する。この状態は、主体にとっては予想（期待）に反するものであるから、自己が安全空間に存在しているとは認識できず、むしろ不安を感じることになる。 ϕ の最小化サイクル（フィードバックプロセス）に失敗したこのような場面であっても、 $\sigma_{k,in}$ および $\sigma_{k,out}$ をバランスよく小さくすれば、フィードバックサイクルは制御を取り戻せる。しかし、これらが未分化であって十分な独立制御性を有していない場合には、両者を同時に小さくしてしまうことになる。その結果、 $\sigma_{k,out}$ が過度に小さくなってその固有の揺動（ノイズ）の範囲以下にまで達すると、 $\sigma_{k,out}$ 重みとしての機能が実施的に損なわれ、それに随伴する $g_k(X)$ が存在しない場合と同じ力動を呈してしまうのである。固有の揺動量は、制御性の低い σ_k 要素ほど大きいため、この場合もっとも新しく内在化された対象恒常性に関わる $g_k(X)$ から0になっていく。

この状態に陥ったまま、図1の②の段階において、エネルギーのアウトプットがなされると、それは対象恒常性に関わる $g(x)$ の傾きが0となるため、結果として次元が縮退した形での F を得ることとなる。

この力学を用いて重度神経症群の力動を説明する。潜伏期前期の発達の失敗によって、情動と行動の独立性が低いまま強いエネルギー ΔX が生じると、対象恒常性に関わる心的基質を用いることができず、あたかもそれを獲得していないような反応を退行的に示すこととなる。あるいは、エディプス期を越えて内在化されたが、まだ構造化されていない超自我の原始的表象物がその書き換えが十分でない場合も同様である。

いったん機能を失った $\sigma_k g_k(X)$ を取り戻すには、それに関連した $\sigma_{k,in}$ に起動をかけ、フィードバックサイクルを再び回し始められればよい。その際、このサイクルは、主体の能力で制御可能な性質を持つ適量のエネルギーによって、快感原則が破綻なく安全に機能するものでなければならない。 $\sigma_{k,out}$ とともに $\sigma_{k,in}$ が機能を失ったとき、快感原則の評価のために用いられる ΔF はもはや主体の内面で表出するものだけに限られるが、前述した「心的な次元の縮退」によって表出する自己愛空

想こそが、そのためのエネルギー源となるのである。この力動は、専ら主体の内的要因に由来するエネルギーによって起動されるプロセスなので、そのサイクルが主体の制御範囲にあることは当然である。

フィードバックサイクルはしかし、自己愛空想によらずとも回復することがある。外部から適量・適質のリビドー備給がなされる場合である。主体はこのようなリビドーの供給を積極的に外部に求めることもある。

このようにして自己愛が修復されることで、 $\sigma_{k,in}$ に再起動がかかる。しかしながら、自己愛の修復が起こらなければ、自己愛空想を浮上させるフィードバックサイクルが維持され続けるため、エスカレーションが起きることとなる。

一方、高次の神経症群は、 $\sigma_{k,in}$ と $\sigma_{k,out}$ の独立制御性を獲得している。 $A_{ij} = \partial f_i / \partial x_j$ の傾きの閾値を越えるような場合は、 $\sigma_{k,out}$ が不定となるため、 $g(x)$ が0となるために生じる先のプロセスと同様の力学が生じることとなる。この傾きの閾値を越える場合と言うのは、自我境界内部空間Aの制御性の能力を越えるほど大きな葛藤などが想定される。

だが、高次の神経症群は、 $\sigma_{k,out}$ が小さくなくても、 $\sigma_{k,in}$ はそれに伴って小さくなるようなことは起きず、外的現実と心的現実の認知は維持される。そのために、 ϕ^2 を最小限にしようとするフィードバックサイクルは維持されるためにエスカレーションは起こらず、ゆっくりと自律的に自己愛空想は消失することとなる。

4. まとめ

4-1 仮説の修正

理論構成から、人格構造ごとの自己愛空想浮上力動仮説が示され、その仮説に基づいた、発達論および構造論的力動の記述の結果として、以下の精神物理学的数式が構成された。

$$\text{精神病性人格構造群 } \Delta F_{\text{psy}} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \Delta F_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ A_a \end{bmatrix} \Delta X$$

$$\text{境界性人格構造群 } \Delta F_{\text{bor}} = \begin{bmatrix} 0 \\ \Delta F_b \\ \Delta F_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \Delta X$$

$$\text{神経症性人格構造群 } \Delta F_{\text{neu}} = \begin{bmatrix} \Delta F_c \\ \Delta F_b \\ \Delta F_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A_c \\ A_b \\ A_a \end{bmatrix} \Delta X$$

そして、常態化しない自己愛空想浮上力動を説明する神経症性人格構造Aの内部構造と、フィー

ドバック力動もまた物理学的数式化によって傍証された。それは、以下に示される通りである。

重度神経症群：心的基質 g_k のそれぞれが内在化されるときに、それに随伴する $\sigma_{k,out}$ および $\sigma_{k,in}$ が互いに未分化なままの独立制御性を現実とのやり取りによる書き換えを通じて獲得していないために、 $\sigma_{k,out}$ および $\sigma_{k,in}$ の独立制御性が未熟であるという構造的特徴を持ち、現実と期待の齟齬 $\overline{\phi^2} > \phi^2$ が起きた場合に、対象恒常性次元が縮退した形での反応としての自己愛空想の浮上を引き起こすこととなる。そして、縮退した、自己愛空想 ΔF という、主体の内的要因に由来するエネルギーによって、あるいは、外部から適量・適質のリビドー備給がなされる場合に、自己愛が修復されるので、 $\sigma_{k,in}$ に再起動がかかるが、自己愛の修復が起こらなければ、自己愛空想を浮上させるフィードバックサイクルが維持され続けるため、エスカレーションが起きることとなる。

高次神経症群：自我境界内 A_{neu} の処理能力を越える大きな葛藤が生じた場合、 $A_{ij} = \partial f_i / \partial x_j$ の傾きの閾値を越え、 $\sigma_{k,out}$ が不定となると、対象恒常性を構成する $g(x)$ が0と同じアウトプットとなり、自己愛空想が生じる。だが、高次の神経症群は、 $\sigma_{k,in}$ と $\sigma_{k,out}$ の独立制御性を獲得しているため、 $\sigma_{k,out}$ が小さくなくても、 $\sigma_{k,in}$ はそれに伴って小さくなるようなことは起きず、外的現実と心的現実の認知は維持される。そのために、 ϕ^2 を最小限にしようとするフィードバックサイクルは維持されるためにエスカレーションは起こらず、ゆっくりと自律的に自己愛空想は消失することとなることが数式から示された。

このように、今回の物理的数式化の手続きによって、高次の神経症群の鑑別仮説も描かれた。よって表1に示した重度神経症性人格構造群の仮説は以下のように修正された。また、高次神経症性人格構造群の仮説も以下の通り加えた。

③' 重度神経症群は、潜伏期前期固着を有する。つまり、対象恒常性は確立しており、基本的な自己愛保持能力と人格構造要素の基本的素因を獲得している。それにも関わらず自己愛空想の慢性化を示すのは、心的安全空間の形成過程の途上にあるかあるいは未発達であり、また、厳格な原始的超自我が残存するために、内的に欲動エネルギーの浮上が起きると自我が起動するための心的空間の脆弱な境界が揺らがされる。そのため、自我が起動するための心的安全空間が維持されず、対象関係機能が退行し、自己愛空想が浮上する特徴を持つ。その際、自己愛空想に十分浸るか、外的現実からのリビドー備給による自己愛の修復がなされない限り、自律的に自己愛空想から脱却することはできない。

④ 高次の神経症群は、基本的な自己愛保持能力と人格構造要素の基本的素因を獲得しており、心的安全空間も内在化していて、超自我の修正も進んでおり、自己境界が明瞭である。それでもなお、外的現実による傷つきや、個人の処理能力を越えた葛藤の浮上によって、現実的な自己愛の枯渇、あるいは枯渇の危機が生じた場合に、一時的に自己愛空想を浮上させる特徴を持つ。しかし、自我の処理過程は一時的に退行するものの、ゆっくりとしたスピードで回復することが可能であるため、葛藤の処理と並行して自己愛空想から自律的に緩やかに脱却できる。

4-2 物理学的数式化の意義

精神分析理論においてシステム理論の援用の有用性が認められてきているが (Tyson, & Tyson, 1990), そもそも生物学的なモデルに基づいている精神分析理論は揺動的平衡論など, こういった原理論になじみが良いことがわかっている (川村ら, 2011)。それゆえに心的力動を物理学の公式によって説明する試みを行った。この公式化を経て, 理論研究では見過ごされていた新たな理論的考察が行われた。特に, 心的基質 g_k 間のバウンダリーが in-out の繰り返しによって独立制御性を高めるという物理学的理論とフィードバックの理論によって, 精神分析学的に潜伏期前期において必要と考えられてきた活動体験と心的構造の発達メカニズムの関係についての理論的説明が精緻化され, また, 高次と重度の神経症性人格構造群の鑑別仮説が記述できた点は重要である。このように, 物理学的数式化の手続きによって理論構成の必要十分性, あるいは構成概念妥当性の検討がなされた。

また, 鑑別仮説の文章による表現は, 示された通り過程の記述に陥ってしまうものである。この点がカーンバークをはじめとする過去の研究者・臨床家たちの苦勞した点だ。それがもし, 等式や図によって表現できるのであれば, 鑑別仮説の統合度やシンプルさが格段に上がるだろう。診断のカテゴリー化が目指した方向で, 力動表現が失われない一つの方略と言えるだろう。今回は一つの試みではあるが, このような, 統合度, シンプルさを目指したうえで, 力動表現を失わない診断基準を作っていく試みは今後も検討され続ける必要がある。

4-3 結論

本論では, 川村 (2013) の自己愛空想浮上時における発達的人格構造鑑別診断仮説に基づき, 重度神経症群の鑑別診断理論の物理学的数式化を試みた。それによって, 仮説の修正がなされ, 力動表現の構成概念妥当性を吟味するに至った。特に高次神経症性人格構造群の仮説が構成でき, 重度神経症群の鑑別仮説がより明確になったことは重要な成果であった。今後はこの仮説に基づいた事例検討を積み重ね, 仮説の妥当性の傍証, 検証が繰り返されていくことが望まれる。

参考文献

- Bach, S., "On Narcissistic Fantasies." *International Review of Psycho-Analysis*, 4, 1977, pp281-293.
- Grotstein, J. S., "Inner Space: Its Dimensions and Its Coordinates." *International Journal of Psycho-Analysis*, 59, 1978, pp55-61.
- Gunderson, J., *Borderline Personality Disorder- A Clinical Guide*. American Psychiatric Publishing, 2001.
- 川村良枝・髭香代子・伊藤裕子「小集団と心的安全空間」『モノグラフ ICU21 世紀 COE プログラム「平和・安全・共生」研究教育：心的安全空間の生成グループ 小谷英文編』国際基督教大学高等臨床心理学研究所 pp. 117-121.
- 川村良枝「重度神経症群の境界反応浮上力動—自己愛空想による鑑別査定仮説—」『聖学院大学論叢』第 26 巻第 1 号 2013 pp. 1-14.

- Kernberg, O. F., "Differential Diagnosis in Adolescence." *Severe Personality Disorders*. Yale University Press, 1984.
- 小谷英文「心理力動論：PAS理論の基礎」『ガイダンスとカウンセリングー指導から自己実現への共同作動』北樹出版 1993 pp. 85-103.
- 小谷英文「ニューサイコセラピー」『ニューサイコセラピーーグローバル社会における安全空間の創成』風行社 2008a p. 253-275.
- 小谷英文『ダイナミックコーチングー個人と組織の変革』PAS心理教育研究所出版部 2008b.
- 武山芸英・小谷英文「メイトリックス理論の公式化」小谷英文編『現代のエスプリ 504 グループセラピーの現在ー精神疾患集団療法から組織開発タスクフォースまで』至文堂 2009 pp. 36-47.
- Tyson, P. & Tyson, R. L., "Narcissism and Superego Development." *Journal of American Psychoanalytic Association*, 2, 1984, pp. 75-98.
- Tyson, P. & Tyson, R. L., *Psychoanalytic Theories of Development: An Integration*. New Haven: Yale University Press, 1990, pp2.
- Wallerstein, R. S., "Reviews of Kernberg' s Severe Personality Disorders: Psychotherapeutic Strategies." *Journal of American. Psychoanalytic Association*, 34, 1986, pp. 711-722.

注

- (1) 物理学の記述方法に習って、太字 (Bold) でベクトル行列式を示す。
- (2) 物理的状態のエネルギー準位はハミルトニアン固有値に対応している。よって、ある固有値に対応する固有ベクトル (固有関数) が複数存在する場合、物理的な現象としても縮退が起きる。そのため物理学などでは、ある固有値に対して n 個の固有ベクトルに対応することを「固有値が (n 重に) 縮退している」と呼ぶ。ここでは、 A の部分行列が 0 として構成されるため、 ΔX の値に関わらず、 F の部分行列が 0 となり、3次元だったものが、2次元、あるいは1次元へと変換されることを表している。また、この数式と良く似た論考は、Grotstein (1978) によって、内的心理空間の次元退行として同一視の視点から示されている。

Psycho-physiological Formulation for the Differential Assessment of Severe Neurotic Patients: Hypothesis of Differential Assessment with Narcissistic Fantasy 2

Yoshie OHASHI

〈Abstract〉

In this paper, the author proposes a developmental hypothesis for differential assessment of personality structure (Kawamura, 2013) in psycho-physiological formulation. This paper aims to identify severe neurotic patients, that is, to test the validity of the expression of the dynamics of this hypothesis. As a result, the proposed dynamic hypothesis for higher neurotic personality structure patients modifies the former hypothesis. This follows the author's statement in a previous paper that refinement of the original hypothesis is an issue to be solved and that further study supported by case studies must be carried out.

Key words: Severe Neurosis, Differential Assessment, Psycho-physiological Formulation, Psychodynamics